出奔するマグレブ系「移民第二世代」の娘たちの物語とテリトリー
── レイラ・セバールの八十年代の小説を中心に ──

Creating Story and Territory : Leïla Sebbar's Running Away "Beur" Heroines

My essay presents a reading of two novels of Leïla Sebbar, a French novelist, whose works are classified usually as North African literature written in French. Born in 1941 in Algeria during the colonial administration to a French mother and an Algerian father, Sebbar never formally studied the Arabic language. She left her homeland in 1959 to attend university in France; she currently resides in Paris. Sebbar's mixed heritage as a so-called "croisée" has engendered feelings of alienation and exile. Considered neither French nor Algerian, she exists simultaneously between two cultures and civilizations. She sets her novels in the economically-depressed milieu of the "Beurs", the second generation of North

石川　清子
文化政策学部国際文化学科
Kiyoko ISHIKAWA
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of International Culture

この十数年においてフランス文学というジャンルはフランス語圏文学としてとらえられ始め、その中でも地域圏単位での研究が盛んになってきた。これはアングロ＝サクソン系のポストコロニアリズム研究に連動するものであろうし、何よりもフランスの旧植民地出身作家の活躍に対応する動きに他ならない。フランス以外の出自の者がフランス語で書く作品をどこに分類するかという問題は、書店の棚のどこに置かれるかという話題をめぐって何度となく取り沙汰されてきた。例えば、モロッコ出身のタハール・ベン・ジェルーンの小説が、フランスの書店でしばしば翻訳書として扱われるように（ベン・ジェルーン：51）、帰属の曖昧さが作家と作品のアイデンティティをプロブレマティックにしている。マグレブ系作家の場合 ── マグレブという語はここでは、フランスの植民支配下にあったモロッコ、アルジェリア、チュニジアを指すものとする。マグレブ＝アラブと等価できない複雑な多様性については、ここで触れる余裕はない ──、出身国側ではフランスの残した痕跡を負の遺産として排除する方向にあるゆえ、フランス語で執筆すること自体が背信行為として非難され、またフランス側は彼等、及び同国出身者の背後にあるイスラーム文化という他者性ゆえに彼等を十全には受け入れていない。

それでは、フランスで生まれ育ったマグレブ系移民の息子や娘たち、いわゆる「ブール」（Beurs）世代の書き手の作品はどう分類されるのか[1)]。フランスにおいて「移民」（immigrés）と括弧で括られ偏見をもって扱われるのが、マグレブ系労働者とその子供たちであった。彼等の多くはフランス国籍である。しかし、その作品は例外なくアラブ、マグレブ、アフリカという書架に並べられている。帰属先の二重性という同じ括弧で括られつつも、マグレブ出身の作家には祖国であれ幼年時代であれ、回帰すべき起源がある。対してブール世代は親世代とは文化的に断絶し、かつ受け入れ国からも他所者扱いされ、マグレブ／フランスのはざまを漂流することを余儀なくされる。しかも、回帰すべき場所のない彼等の作品には、フランスに何とか自分の場所を見い出そうという共通するテーマがみられる。ブール世代の作品は紛れもなく「フランスから発信」されているのだ（Djaout: 37）。ブールの文学が他と明確に境界を引くかたちで存在するかどうかは、良くも悪くも差別化される意味で度々議論され、また、これらの作品研究がフランス本国よりもむしろ合州国、英国で活発に進められているのには、文学テクストとしての価値への配慮よりもストレートな感情発露を優先させる彼等の文学を、フランスの研究者が正統と認めないアカデミズムの意識も働いているだろう[2)]。事実、ハビナ・セブヒはブール文学を「私生児文学」（littérature naturelle）と呼んでいる（Sebkhi: 27）。

レイラ・セバールというアラビア語の名前をもち、1941年、フランス支配下のアルジェリアで生まれ、父親がアルジェリア人、母親はフランス人、フランス語を母語としアラビア語は話せず、フランス国籍を有する作家は、ではどう分類されるのか。「私はフランスの作家（…）。フランス人だけれど少し特殊」（Sebbar 1997: n. pag.）と自身が表明しても「少し特殊」な部分は限りなくマグレブ性に彩られている。その名前ゆえか、好んでブール世代を描くゆえか、彼女は常に「フランス語表現マグレブ作家」に分類され、このジャンルのアンソロジーに入れられてきた。また「ブールの作家」として言及されもする。前者に属するにせよ後者にせよ、「マグレブ側」というスタンスをとることに変わりはないが、アラブ名の作家なのにアラビア語を話さないのは詐欺だ、とモロッコの学生から非難されたことがあるという（Sebbar et Huston: 125）。セバールはサルトルらの主宰する雑誌『レ・タン・モデルヌ』に評論を執筆することで作家活動を始めたが、当時はレイラ・セバール＝ピニョンと夫の姓を付していた。が、まもなくこの姓を外し、署名される氏名からフランス的徴しを取ってしまった。マグレブの同胞からみれば、セバールはいかがわしい素性の作家なのだ。

植民支配が一世紀以上に及び、七年半の

African immigrants residing in France's turbulent inner cities. Like the author, her characters experience the conflict between cultural identities imposed by France and the traditions of their heritage. In her novels, *Fatima, ou les Algériennes au square* (1981) and *Shérazade,17 ans, brune, frisée, les yeux verts* (1982), Sebbar creates marginalized heroines and an orality of expression inspired by the patterns of feminine speech unique to the immigrant community. The author explores the difficulties such women experience in forging a new identity amidst the opposing demands of two disparate traditions.

過酷な闘争を経て独立を果たしたアルジェリアとフランスの関係は、モロッコ、チュニジアに比べてはるかに軋みが多い。フランスの外国人と差別問題を長年調査してきた林瑞枝は、アルジェリア人は「差別の序列化」の最下位にくるとしている（林 1984: 117）。アルジェリア／フランスという未だ消えぬ憎悪と偏見の溝のはざまで、セバールはどちらの側からも快く迎え入れられない作家ということになる。ブール世代の作家以上にフランスでの研究は少なく、逆にアングロ＝サクソン系の女性研究者が、他のフランス語表現マグレブ女性作家の誰よりも好んでセバールを取り上げるのは、この作家の「少し特殊」な位置ゆえかもしれない[3)]。

ところで、マグレブ出身の作家もブールの作家も驚くほど共通して自伝的要素を作品に盛り込んでいる（Bonn, Khatibi: 109-116）。対してセバールは、自らの小説を自伝の色彩に染めない。また、主人公の殆どがブールの少年少女たちである。マグレブ系作家というフランス文学史のはざまの、さらにはざまで物語を書くセバールという作家の営為について、80年代に執筆された小説を中心に覚書としてまとめることにする。

Ⅰ. セバールとマグレブ系移民第二世代「ブール」

「大抵の人々は原則として、一つの文化、一つの環境、一つの故郷を知っている。ところが、亡命者は少なくとも二つのそれらを知っている（…）」（Said: 55）―― E・サイードは自らの境遇を重ねながら、亡命者＝本来いるべき場所以外で生きることを余儀なくされた者の両義的状態をこう記す。しかし、戻るべき場所を予め喪失している者は二つの文化、環境、故郷を所有しているのだろうか。

セバールは、自分は「両親が経験した二重の追放を相続している」と述べる（Sebbar et Huston: 50）。フランス語教師だったアラブ人の父は、研修先のドルドーニュ（仏南西部）で知り合ったフランス人の母と結婚しアルジェリアの片田舎に連れ帰る。セバールを含む四人の子らはすべてフランス語で育てられた。母を気遣ってアラビア語を使わない父は言語的に、アルジェリアに一人で渡ってきた母は地理的に「追放」されていた。父がセバールらを父方の家に連れていくことは稀で、あったとしても言葉が通じない。54 年に独立戦争が始まり、作家の中高生時代、一家は周囲から一切孤立して生活していた。18 歳でフランスに来るまで、自己形成の場は両親の職場、学校であったという。

アルジェリア／フランスという引き裂かれるべき二つの文化のどちらも所有していない ――「二重の追放」を受けたセバールの身上に、「ゼロ世代」（ギャスパール、セルヴァン＝シュレベール: 247）と呼ばれるブールの世代が重なる。80年代、移民労働者の代弁者として健筆をふるったベン・ジェルーンはこの若者たちについてこう記す。

> 彼等は二つの文化に引き裂かれているとよく言われる。そうなるためには、その二つの文化を所有していなければならない（…）。だが実際はちがう。どちらの文化についても、彼等は大概その断片しか所有していないのだ（…）。（Ｂｅｎ Jelloun: 104）

ブール世代は双方の文化、記憶、歴史から排除されている。彼等がメディアに注目され始めた 80 年代初期に、セバールが小説を書き始めたのは偶然ではない。81 年夏リヨン郊外、盗車を乗り回した挙句炎上させる「ロデオ」に興じるマグレブ系二世の若者たちが世論の的になった。これまで社会の欄外に置かれていた「招かれざる客」、マグレブ系移民労働者の子供の存在が顕在化し始める。オイルショック後のフランスの景気後退、右翼による移民排斥潮流の高まりもこの時期に重なっている。83 年10月から12月にかけて、彼等への不当差別に抗議して、リヨンの若者数名が先導しマルセイユからパリを歩いた「平等を求め差別に反対する行進」、通称「ブールの行

進」は一気に彼等をクローズアップし、「ブールイズビューティフル」、「ブールジョワジー」などのスローガンの下にブールが結束していった。ちなみにセバールは「すべてのブールに」(Sebbar 1984: 8)献呈した84年『息子よ話して、おまえの母親に話して』でこの行進を話題にし、翌年刊行の『シェラザードの手帳』(Sebbar 1985)では主人公に「行進」と同じ旅程を辿らせている。ここでは触れないが、「ブール文学」が脚光を浴びるのもこの時期である[4)]。

非行や犯罪という否定的イメージで語られる彼等に、セバールはなぜこだわるのか。

> 移民の子たちはフランスに暴力を働く。向こうでもここでも、フランスが彼等の父親にそうしたように。彼等にはその記憶はないが、忘れないだろう。彼等はフランスを相手に、憎しみが混じった、倒錯した、時には人を殺しさえする愛の物語を作っていくだろう。(…) 彼等が周囲に適応せず、特異で、暴力的、我を強く張り、今という時代をつかむ能力に長けていてほしい。彼等は私の神話だから。(Sebbar et Huston: 59-60)

共和国に奇妙な破壊=変化の力をもたらす「移民の子たちに、[セバールは] 文学のなかでテリトリーを与えよう」(Laronde 1987-8: 8)、「他所者、何者でもない奴等、アラブ人に、フランス文学のなかで、少し特別で奇妙な文学的市民権を与えよう」(Hugon: 37)とする。

81年の『ファティマ、あるいは辻公園のアルジェリア女たち』(Sebbar 1981)から91年の『シェラザード狂い』(Sebbar 1991)までの約10年、セバール作品の主人公はすべてブール、とりわけ失踪するブールの娘である。『ファティマ』の家出娘、ダリラは名前こそ異なれ、翌年から刊行されるシェラザード三部作のシェラザードへと引き継がれている。当時マスコミがブールの少年の非行ばかりをクローズアップするのに対して、「『移民の娘たち』は真に議論の中心となることは決してなかった」(Guénif Souilamas: 23)。ところが、大都市郊外(バンリュー)というゲットーで憤懣やる方なくくすぶるのではなく、逃走という形で過去を暴力的に断ち切り新しい状況を切り開いていく娘たちのほうが、「変化の真の原動力」(Begag 1988 : 11)たるのではないか。80年代初めはマグレブ系少年たちの犯罪の陰で、親の強制する結婚を逃れるため出奔する娘たち(fugueuses)が話題になった時期でもあった[5)]。ダリラとシェラザード、二人の家出娘を追ってみよう。

Ⅱ. ダリラからシェラザードへ

正確を期するならば、『ファティマ』はダリラが家出を決行するところで終わる。多人数の兄弟姉妹と両親とでパリ郊外、ラ・クールヌーヴのHLM(低家賃集合住宅)に住む高校生のダリラは、遅い帰宅を咎められ父から暴力を受ける。このままではしきたりどおり父が結婚相手を決め、会ったこともない男のためにアルジェリアに帰されてしまうだろう。ダリラは一週間部屋に閉じこもり、自分が7歳だった頃の母たちのおしゃべりを回想する。ダリラの消えた部屋で、夫にも娘にも無力な母ファティマが泣き崩れる —— セバールの他の作品同様、物語らしい物語はない。まるで歴史=物語(histoire)なき人々に正当な物語など不要だとでもいうふうに。ここでは、団地の隅の辻公園という外部から遮断された場所で、外部へ出られないアルジェリア女たちのとりとめもない話が延々と語られる(彼女たちはアルジェリア方言のアラビア語で話しているはずだ)。どうでもいいおしゃべり、うわさ話 —— パリのアラブ人街バルベスの安売りスーパー、タチでの買い物、国から来た親戚が土産に買っていく香水の銘柄、不良少年のグループ抗争、娘が使うタンポンという「悪魔の棒」、故郷へ送還する遺体を収める鉛製の棺、店の名、土地の名、同じ団地のあらゆる国から来た移民の子の名 —— が事細かに述べられる。

女たちの井戸端会議に主題はない。話題にのぼる言葉の連想から、「そういえば」と

いうふうに別の話題へ移っていく。セバールはそれら取るに足らぬ日常の事柄の細部を飽くことなく、稚拙ともいえる文体で記していく。R・バルトが揶揄をこめて「読みうる」と呼ぶ古典的小説のエコノミーからすれば（Barthes: 10）『ファティマ』は絶えず逸脱していく下手な物語である。唯一物語があるとすれば、おしゃべりの輪にいるファティマの化繊のスカートに頬をすり寄せる幼いダリラが、訳も分からず耳を傾けているなかから聞き分けるムスタファの物語だろう。外出もできず話し相手もいない苛立った若い母親に虐待された幼いムスタファは、病院に収容された後一体どうなったのか、ダリラは脱線ばかりする母たちの話の合間に、「で、ムスタファは」と話の続きを催促する。ダリラが問わねばムスタファの話も、他の細切れの話題同様、中途半端な一件のまま忘れられるだろう。重ね重ねの「で、ムスタファは」の一言で、ムスタファのエピソードは初めて始まりと終わりをもつ物語となる。ムスタファも無事だったのだから —— 回想するダリラは失踪を決意する。

HLM、郊外というゲットーから逃走するダリラにとって、持ち去るべき所持品とは何だろう。親の祖国からもフランスからも確実に相続するものがない子らには、記録するに値しない忘れ去られる記憶こそが、親から受け渡されるものではないか[6]。主人公の父親は、団地の浴室に長男を呼び入れ犠牲祭用の羊を屠ってみせるが、息子は血の光景によろめいてしまう。継承すべき祖国の伝統は、次世代の家父長の象徴的転倒をもって破綻してゆく（232）。セバールは、自らの根を断ち切り新しい環境を希求する娘のラディカルさを描きつつ、物語の題に母の名を使って、その無力な母に光を当てる。他所者の国での母の生活は、母の母の代とは全く別物であり、また、フランスで育つ娘にも継承されない。ファティマの生活は、彼女一代限りの経験なのだ。誰がそれを覚えていてくれよう。故郷の村から大切に持ってきた絨毯を再び織るように、女たちはおしゃべりという即興に任せて、娘の「で、ムスタファは」という繰り返しのモチーフを連続紋様に記憶という物語を織っていく。作家はアクチュアルな話題の「いま、ここ」に執心し、記録係の情熱をこめて描写する。セバールは彼女たちには他者の言葉フランス語で、彼女たちの年代記を綴る書記となる。

女たちのおしゃべりから、セバールは二つの力を引き出すようにみえる。一つは、公の言葉を持たない社会的弱者の存在に光を当てる力、もう一つは、『千夜一夜物語』の巧妙な語り手、シェヘラザードの語りの策略——物語に物語をはめ込み、継ぎ足し、そして無限に増殖させていく——から自らの、そしてブールたちの、異なるものを掛け合わせて新たなものを生成していく力を。

『シェラザード、十七才、髪は褐色の巻毛、眼は緑色』（Sebbar 1982）は、HLM を飛び出したダリラの後日譚とも読める。シトロエンの工場のあるパリ郊外、オルネー・スー・ボワの HLM に住むシェラザードも、父から結婚を急き立てられ高校卒業を目前に家出してしまう。作品の題は、主人公の父親が警察に届ける娘の特徴記載である。彼女は家出娘の通例のようにナイトクラブでアルバイトするのではなく、昼間はポンピドゥーセンターの図書館に通い、万引き、盗みで食べながら、いわば社会の寄生者としてパリ市街中心のスクワットと呼ばれる不法占拠建物に住み着く。『ファティマ』が移民の郊外の物語ならば、『シェラザード』は、RER（首都圏高速鉄道網）とメトロの集結駅レアールとボブール周辺を中心とする 80 年代のパリの物語である[7]。

この作品も、核となる物語はない。シェラザードがスクワットでさまざまな出自の、だが彼女同様どこかへ行こうとしている若者たちと交流する一方で、独立戦争下のアルジェリアで生まれた青年、ジュリアン・デロジエを介してアルジェリアを描いた絵画や本を知る。彼女はアルジェリア行きを決め、スクアットの仲間のテロリスト、ピエロの運転する車に同乗する。途上ピエロの積んだ爆弾が爆発し、車は炎上。ピエロは死亡し、シェラザードは姿をくらます。

作品の中核は物語性にではなく、出会う人々や事物を通してシェラザードが自己形

成する過程にある。各章は数頁で各々、彼女が出会う人物の名が章題になっている。ジャミラ、クリム、ラシッド、バジル、ズズ、エディー —— 彼等は、主人公と同じマグレブ系移民第二世代や混血、グアドループ、マルチニークの海外県出身者といった「二級市民」であり、ジュリアンを除いて姓＝家の名が言及されず、何らかのホームレスネスを生きている。もっともジュリアンでさえピエノワール（独立以前にアルジェリアで生まれたフランス人）であるゆえ、この本には「生粋のフランス人」は一人もいない。ずらりと名が並ぶ53の章題はそのままフランスの現実を映す人種の坩堝であるのだが、注目すべきは、これら聞き慣れないフランス語以外の名に混じって、ドラクロワ、ゴダール、ヴェルディ、ウム・カルスーム（アラブを代表するエジプトの女性歌手）、フェラウン（カビリー出身のフランス語作家）、カワ（カワイのバイク）、マチスといった名詞が挿入され、あらゆる文化的事象のごたまぜの観を呈していることだ。この異種混淆性、これは異なる二つの価値観や生い立ちの背景で分裂するブール、そしてセバール自身が体現することであろうが、『シェラザード』は主人公と作者のアイデンティティとも言うべきこの雑種性をあらゆるレベルに駆使する。第一章「シェラザード」を仔細に検討してみよう。

Ⅲ．スカーフの結び目

ポンピドゥーセンターの図書館で、ジュリアンは度々見かける娘の緑色の眼にひかれ、後を追いかけファーストフード店へ入る。娘も気づいていたようで、ジュリアンは自己紹介する。娘はシェラザード（Shérazade）と名のる。『千夜一夜物語』の語り部の姫、シェヘラザード（Shéhérazade）などと大それた名前はつけられるのかとジュリアンは驚くが、娘は平然とコカコーラを飲んでいる。アジヤデ（ピエール・ロティの同名の小説の主人公。19世紀イスタンブールのハーレムに囲われた女性）という名でも大丈夫かと聞くと、シェラザードはそんな名は知らないといい、ジュリアンは博識をもって説明する。なぜそんな女の人の話をするのかと娘に問われて、彼は「あなたと同じ緑色の眼をしているから」と答えると、シェラザードは呆れて顔をそむけ、ジュリアンは仕方なくリベラシオン（左派若者層支持の日刊紙。81年に紙面を刷新した）を読み始める。ここまでが章の前半である（7-8）。

若干の固有名詞について括弧内で説明を入れたが、ここで問題になっているのは、ファーストフードやコカコーラといった80年代フランスの大衆文化を背景にして、かなり限定されたペダンティックなオリエンタリズムの知識が展開される、ハイ／ロウの横並びの意外性とひとまずは言える。事実、ジュリアンは東方のオダリスク（ハーレムの女性）を主題とした絵画の収集家で、自分の生まれ育ったアルジェリアへのノスタルジーからアラビア語を習得したばかりか、アルジェリアの歴史関係文献の研究者でもあるのだが、セバールはリアリズム的描写でさりげなく事柄や事物に触れつつ言外の情報を盛り込む。ジュリアンの知的、社会的位置ばかりか、「緑色の眼」へのこだわりから、彼がオリエンタリズムのクリシェの呪縛にかかっていることもそれとなく暴いてみせる。緑色の眼は、西欧文学芸術の系譜でエキセントリックな女性、オリエントの女性の属性として語られてきた[8)]。そればかりではない。「シェラザード」に対して正しいアラビア語で「シェヘラザード」と言うジュリアンの応答は、彼が古典アラビア語に精通している事実以上に、シェラザードという名が hé という「最も甘美な、最もオリエンタルなシラブルを失った」（Sebbar 1991: 164）フランス語化した名であることも示している。我々のシェラザードはフランス化したアラブのアイデンティティをもつ者として冒頭から登場してくるのだ。

会話体で成り立つ前半に対し、後半は単一の段落でぎっしり文字が詰まっている。

> シェラザードは首にかかったウォークマンのヘッドホンをつかみ両耳にしっかり固定したが、光るフリンジのついた赤

と黄色のレーヨン製スカーフにヘッドホンがひっかかり、絡んだ糸が飛び出した。そのスカーフといえば、渋い色調で幾何学模様のブランド物コピーがモノプリで売り出される前に、バルベスのアラブ人や国の田舎からやってきた女たちが好んだタイプのもので、柔らかすぎる質の悪い布地のせいでウォークマンのコードがしょっちゅう絡むし、両端を一度だけ交差させたのではすぐほどけてしまうので、シェラザードはこのスカーフを特に好きという訳ではなかった。ただ、朝出かける間際にこのスカーフを選ぶときには、けばけばしい色、そして見るからに安物と分かるストレートさが、あえて表には出さないけれど彼女の悪辣な悦びを代弁してくれ、それは、ファーストフード店の合成樹脂のオレンジ色のテーブルに微かに陽が射すと、辺りがまるで夏のように鮮やかに明るくなるのと似ていた。また、この蛍光色のスカーフはあまりにも人目を引くこと、ブルゾンの首のところに深く入れても、それでもまだ目立ってしまうことも知っていた。それに、この数週間ずっと持ち歩いている黒と白の格子柄のパレスチナのスカーフ、ケフィアも、身につけていればすぐ警官に眼をつけられてしまう。フォーラム・デ・アールで、あるいは地下鉄の中で、ずっと洗っていないため白い部分が灰色に変色したケフィアを首に巻いた若者が巡回中の警官に呼び止められているのを、シェラザードは何度となく見ていた。そのなかには許可証を持っていない者もいて、そういう者に対して警官は浮浪罪で逮捕するぞと脅したりしていた。そうやって警官たちは許可証更新の警告をしていたのだが、ある日何を思いついたか、そのうちの一人が少年の首のケフィアを取ってひろげてみると、それと同時に、瞬時に何だか判別できる四角い紙の包みがこぼれ落ちた。少年はそれを足で押さえようとしたが、一枚上の警官はその前に、黒くていかつい警官用の靴で踏みつけ、少年はと言えば、同僚の快挙に恐れ入った様子の別の二人の警官に抑えられて身動き一つできずにいた。警官はその紙包みを拾い上げ、証拠物品となるケフィアをぱたぱたはたいてからたたんで脇にはさみ、少年を連行した。未成年だった。ジェーヴル河岸[パリ警察未成年管轄課]まで連れて行くのだろう。こんなことがあって、シェラザードはケフィアをバルベスのスカーフに変えなければならなかったのだ。(8-9)

物語の展開は単に、シェラザードがウォークマンのヘッドホンをつけようとした時、首のスカーフに引っかかって糸が出た、それだけである。叙述はスカーフから逸脱して、そのスカーフがアラブ人街バルベスの安物であること、当のアラブ女性たちはブランド物のコピーを好むこと、その安物スカーフを身につけるのには自己主張があるのだが、家出の身として目立ってはならないこと、それゆえケフィアはまずいこと、なぜなら、パレスチナ支持も含めてアラブ系若者の流行になっているケフィアは、未成年「外国人」取締用の目印になっていること、そのケフィアに隠して若者たちは麻薬の密売をしていること、などに及ぶ。安物のスカーフから飛び出た物語の糸は80年の風俗、社会へと絡みつく。

『ファティマ』のおしゃべりのように、セバールは物語にとっての核心も枝葉も区別せずにいっしょくたにするが、『シェラザード』は枝葉こそを物語のエッセンスとする主客転倒を行う。セバールは人物の心理や感情を素通りし、「いま、ここ」にある卑近な事物や事象にこだわり繊細で微妙なメッセージをこめる。余談だが、90年代に入って、武装イスラーム原理主義者のテロリズムにより荒廃するアルジェリアの矛盾を語る時、多くの作家が哀悼の意をこめて、その犠牲となった文学者タハール・ジャウットに言及する(例:Boudjedra, Djebar)。セバールはあえて、ジャウットではなく、より「低俗な」アルジェリアの歌謡曲ライの歌手、シェブ・ハスニの暗殺をもってテロの狂気を描く(Sebbar 1996)。本好きだが片寄った読書の知識しかなく、自由ラジオ局[9]を聞くのにボブ・マーリィの写真を

認識できない、「おまえは何も知らないんだな」(37)を連発される家出娘にとって、新たに出会う無数の現実はカテゴリーの分類などなしに、あらゆるレベルで同時生起する連続体にすぎない。逸脱しながら集約するこの語りのスタイルは、女のおしゃべりのみならず、夜伽の名手、シェヘラザードのやり方でもなかったか。

さらに、シェラザードの首に巻かれたスカーフを巡る饒舌は、言外に含まれたメッセージをもその結び目に結わえる。イスラーム圏女性のスカーフそのものが、エキゾチシズムや抑圧の象徴として多義的な意味を担うが —— また、89年10月、パリ郊外リセに端を発してフランス全土を巻き込んだスカーフ事件は記憶に新しい(Gaspard et Khosrokhavar) ——、本来頭部を被うはずのスカーフが、マグレブ性をアピールする装身具として用途を変えて使われる時、国の女性とは違う生き方が、フランスで育ったマグレブ出自の女性に選択されていることを暗示している。主人公にとってスカーフは、自己のアイデンティティを示す道具でありながら、他者に属するものとなる。パレスチナのスカーフが未成年取締に一役買う件の背後には、フランス生れの「外国人」の複雑な事情がある。出生地主義を取るフランスでは、73年法によると、両親が外国人でもフランスで生れた者は成年(18歳)に達した日からフランス国籍となる。ところが成年以前は両親の国籍をもち、16歳からは滞在許可証が必要となる。許可証携帯の義務は幼少時に渡仏した移民外国人についても同様である。(さらに、両親がアルジェリア人の場合、63年1月1日以降にフランスで生れた子は生れながらにフランス人とみなされるエヴィアン協定があり、同時にアルジェリア国籍も与えられる当該者の国籍を微妙、かつ矛盾の多いものにしている)(Costa-Lascou、林 1993、梶田: 81-89)。「許可証」とはだから、移民二世がフランスにおいて他所者でしかないことを規定する権力側の証書なのだ。

ポップカルチャーから法制度まで解読させうるスカーフは、主人公がその両端を二度交差させて結ぶ時、ジュリアンが幼少時にアルジェリアの村で見た女たちの結び方と同じだったため、「テーブルに釘付けになるほど感動させ」(13)、その感動が彼にドラクロワの『アルジェの女たち』を想起させることになる。さらに、ルーヴルでこの絵を初めて見たシェラザードは左端に座る女の眼が自分と同じ緑色であることを発見し、彼女は一連のオダリスク絵画で東方の女がどう表象されるのかを探り、ついにはパリ近辺の美術館が所蔵するオダリスク絵画を調べ上げる。「持たざる」ブールが自己を知ろうとする時には、西欧というかつての支配者の資料も重要な手がかりとなる。「私はアルジェリア人」(179)と言う主人公にとって、幼少時を過ごしただけのアルジェリアを知ることは自己確認の第一歩だが、親たちはその情報を与える言葉を有していない。書き言葉としての古典アラビア語の知識がない彼女は、ジュリアンに教わって初めて、パリの街角に残されたアラビア語の落書きを解読する。同胞のメッセージ解読も「他者」の助けを必要とする。19世紀フランスの作家の紀行や手記の他に、ドラクロワ、シャセリオー、マチスなどのイスラーム圏のハーレムの女たちを主題とする絵が、アルジェリアを知る手だてとなる。裸身をさらす幽閉の女を、シェラザードは「どちらかいうと醜いと感じたが、それでも心を動かされた」(245)のは、他者の欲望の眼で見られた「私」及び「私の同類」の表象と対面するからだ。

ジュリアンの前でスカーフをアルジェリア風に結ぶことでシェラザードは、相容れない二つの世界が交わる地点に立つことになる。「堕落したブルジョワの文化」(238)とスクワットの仲間が軽蔑する美術館の文化遺産や書物という学術的な世界と、マーラーやワグナーを聴くジュリアンには耳障りなだけの自由ラジオ局のロックに代表される若者移民文化の世界との交差点に。あるいは過去の文学・絵画の引用を駆使したペダンティックな純文学と、強盗、ファッション、麻薬を散りばめた通俗小説のはざまに。だから、バイト先で店番をするシェラザードはフロマンタンの『サヘルの夏』を

読みながら、「迷彩色だけどちょっと豹柄が入っていてでもそんなに大袈裟じゃなくどっちかというとカーキ色のまだら模様の軍服みたいのだけどそれっぽくないジッパーのついたポケットがお尻にあってくるぶしまで丈のあるそんな感じのパンツ」（172）を探す客の応対をする。

Ⅳ．混淆と生成

コロニアルなアルジェリアのイメージにからめとられていることに無自覚なジュリアンと違って、シェラザードは「私はオダリスクなんかじゃない」（206）と、ついにはアルジェリア行きを決意し再び出奔する。セバールは、自分の居場所を見つけようとする家出娘のビルドゥングスロマンの成長過程で、本来ならば相容れない、さまざまな異質なものに主人公を遭遇させ、それを取り込み新たなる自己形成をさせる。シェラザードとは、無数の断片的事象が通過する身体であり記憶の装置なのだ。そして彼女が常に携帯する「中国雑貨店で万引きした何冊もの赤と黒の手帳」（234）がメモで埋るように、小説自体が作者セバールが分類もせずに書き込む――パリ周辺の自由ラジオ局周波数、ポンピドゥーセンター近代美術館の開館時間、シェラザードの盗品リスト、ドラクロワの日記抜粋、マグレブ系若者が集まるディスコのリスト――備忘録となる。コラージュとも言えるこの方法は、爆死するピエロを『気狂いピエロ』のラストにオーヴァーラップさせることで明らかなように、ゴダールのコラージュ的手法を借りている。

がらくたと出来事の寄せ集めとも言える『シェラザード』は、実はシェラザード一人の物語ではない。根無し草の若者たちがスクワットに流れつき、そして全員どこかに発っていく、パリを通過点とした集合離散の物語である。この作品が魅力をもつとしたらそれは、人物やものの絶えざる混ざり合いが、流動的な、生成の力学を生んでいくからだろう。彼等は自分の場所を見つけようとしながら決して定着せず、つねに漂流状態に身を置かしめ変化していく。祖国という幻想としての起源を求めつつも、シェラザードは結局アルジェリアに行かず、セバールは次の『シェラザードの手帳』で、主人公をマルセイユからヒッチハイクで北上させ、異なるものの寄せ集めでできているフランスを発見させる。

アルジェリア／フランスという敵対関係のはざまに立つブールの娘の矛盾はそのまま、混血たるセバールの矛盾でもあるが、セバールはシェラザードという逃走するオダリスクを「共犯者」（Sebbar et Huston: 79）にして、負のベクトルと考えられる混血性（métissage）、雑種性（croisée）を逆に可能性ととらえ、小説というフィクションに託す。

> 私が追放された状態（exil）について語る時、文化の交雑（croisement）についても語っている。私が生活し書いているのは、私が今いる、合流と分離のこの地点においてなのだ 。（…）私の本の主題は私自身を示しているのではない。そうではなく、私の異なる二文化の掛け合わせ（croisée）、混血（métisse）の歴史を示す複数のしるしになっている（…）。（Sebbar et Huston: 126）

そして、

> 私にとってフィクションとは、［アルジェリア／フランスという］二つの岸辺の間にある傷、隔たりを縫合せる作業なのだ。私は二つが交わる地点（croisée）にいる、ようやく心安らかに、ついに私の場所として。というのも、私が混血（croisée）だからだ。親子関係を探し、歴史、記憶、アイデンティティ、伝統の継承などに関わるものにこだわって書き続ける混血、つまり先祖と子孫を追い求め、「歴史」と世界のまなざしを受ける家族の、共同体の、人々の物語＝歴史のなかに場所を探し続ける、そんな混血だからだ。（…）フィクションを書くことで私は自由を感じ、自分の追放された身（exil）に支えられている気がする。この唯一の、孤独な、荒々しい場所に私が存在するの

を誰も止められない。（Sebbar et Huston: 139）

セバールの創作活動は、自身と同様な境遇のブールの若者に託して、小説という想像上の場所に「沈黙、白い記憶、ばらばらになった歴史」（Sebbar et Huston: 150）しか持たない者にテリトリーを開くことと言える。この意味で、ブールの作家について指摘したサミア・メフレーズに倣って、ドゥルーズ＝ガタリが「マイナー文学」の指標とした「脱領土化」（déterritorisation）は、セバールにとって「再領土化」（réterritorisation）と改められねばならないだろう（Mehrez 27-28）。

80年代とは、今日、多文化主義やクレオール性の名のもとに称揚される、文化のハイブリディティに立脚した世界観が用意された時代だった。E. グリッサンがカリブ海の混淆の歴史を検証した81年の『アンティル論』においても、混血性（métissage）がキーワードとして使われているが（Glissant: 250-251, 462）、これはセバールにとって、同じ追放された者（exilé）の、別の岸辺からの呼びかけともいえる。しかし、これらの声は植民地支配の暴力によって移動を余儀なくされた者の声であって、その文脈を考慮せずに西欧中心主義の世界観に風穴を開けるものとして、我々が同様に賞賛するのは安易にすぎるだろう。また、ブールのブームが去って、フランス在住のマグレブ系若者が新しい局面を迎える90年代に入ってからは、セバールの長編小説の筆力は急速に衰えをみせる。事実、シェラザード三部作の最終作『シェラザード狂い』（91年）は、レバノンへ主人公を旅立たせるが、主題を盛り込むあまり散漫な印象を与える。だからといって、セバールが単にブールの登場に便乗したなどということでは全くない。評論活動から出発して、模索ののち「ようやく心安らかに、ついに私の場所として」みつけたフィクションを書く際に、歴史の流れを切断して変化せしめていく追放された者たちの異種の力に、作家自身の孤独な「はざま」の状態が共振している。セバールの作品発表の時期がブールのクローズアップの時期に先んじていることからも、彼女の営為が孤独に一人で切り開かれたものであることが分かる。

フランスでの差別問題を扱った西暦2000年のある記事は、「ブールの行進」に参加した若者たちが40歳代になり、彼等の子が相変わらず差別の現実に直面していることを記している（Aïchoune et Monnin: 40）。「ブール」が提起した問題は一時的なものではないし、また解決されてもいない。以上の覚書は、レイラ・セバールという、分類する際にしばしば我々を戸惑わせるフランス人女性作家を、文学史の余白に記憶するためのものである。

註

1）ブールは80年代フランスの若者の間で流行った逆さ言葉（verlan）の一種でアラブ（Arabes）を逆さにしたもの。マグレブ系移民第二世代を指す言葉として定着し、86年からはラルース仏語辞典にも入っている（Laronde 1993:53）。アラブという出自を肯定し、彼等自身がこの呼称を使い始めたが、当時のメディアのブールの喧伝ぶり、及び同じ移民第二世代のなかでもマグレブ系のみを特別視するものとして、これを拒否する動きもある。

2）文学のみならず「移民第二世代」文化全般の研究者、イギリス人ハーグリーブスは、91年刊行の自らのモノグラフをブール文学の最初の研究書としたうえで、フランスにおける同様の研究の不在を指摘している（Hargreaves:174）。他にモノグラフレベルでの研究書に、ミシェル・ラロンド（Laronde 1993）、アブデルカデール・ベナラブ（Benarab）等があるが、ラロンドは合州国を拠点とするフランス人であり、ベナラブの言及対象は必ずしもブールに限定されない。

3）離散（ディアスポラ）、流謫（エグザイル）、下級市民としての女性（サバルタン）といったポストコロニアリズム的マージナルな枠組に見事にセバールは適合する。セバールを論じた個々の評論は多数にのぼるが、少なくとも一章をセバールにあてた研究書として以下のものがある。Hayes, Merini, Mortimer, Lionnet, Orlando, Woodhull.

4）ブール世代の出現の経緯、及びその表現活動については、註2）のほかに、Battegay, Gillette et Sayad: 217-230, Laronde 1988 など。

5）マグレブ社会では、一家の女性を監督する力がそのまま一家の「名誉」にかかわってくる。人種差別に加えて、ジェンダーギャップの力関係の犠牲になるのが娘たちである。娘たちの失踪という事態に関して、ベン・ジェルーンは「移民労働者の娘は追放のなかの追放を生きている。（…）彼女は、家族か失踪かという二つの排除しか選択の余地がないゆえに、最も激しい形の変化の強い意志をもっている」と述べている（Ben Jelloun 106）。

6）ブール世代は、彼等の生きるフランス側の文化遺産相続者にもなれない。それは学業不振という形で表面化する。『シェラザード』には複数のマグレブ系

移民労働者の二世が登場するが、多くは学業不振者で、ジャミラという娘は「同じ団地で唯一バカロレアに合格した」(29) と特筆される。同様に、ドリスは「スタール」という単語が独裁者の意味だと知りつつも、スターリンがどういう人物か知らないため、蔑むべき相手を無言でやり過ごす (79)。学校での落ちこぼれは時に、マグレブ系の彼等のアイデンティティにさえなる。アズーズ・ベガーグの主人公は小学校で優秀な成績を収めると、仲間の劣等生に「おまえはアラブ人じゃない」と非難される (Begag 1986: 104-107)。とりわけフランス語に関して、それが彼等の言語であるにもかかわらず、図らずも他者性を体験してしまう悲喜劇ともいえるドラマが展開されるが、ここで論じる余裕はない。ブール文学ブームの発端となったメフディ・シャレフの小説『アルシ・アフメドのハーレムのお茶』(*Le Thé au harem d'Archi Ahmed*) という題は、補習クラスの落第生が、アルキメデスの原理 (le théorème d'Archimède) を表題のようにしか理解できなかったエピソードに由来することのみを指摘しておく (Charef)。

7) 「パリの文学」の系譜からすれば、知的スノッブの集まるカルチェラタン周辺左岸 (例：ボリス・ヴィアン) とも、「ベルヴィルやバルベスといった、よそから移植された、ポストコロニアルな、野蛮化されたパリ」(ゴイティソーロ：122) とも異なる、若者と観光客が集まるあまりにも通俗的な80年代の場所である。『ファティマ』ではダリラと友人たちはボブール、レアール、オデオン等が好みの場所で、「バルベスはよく知らないし、興味がなかった」(24) と言うように、移民第一世代と次世代では、活動領域、嗜好が異なることを示している。ボブールのポンピドゥーセンターは77年、レアールのフォーラム・デ・アールは79年にオープン、RER、B線がシャトレ=レアールと北駅を接続するのが81年、パリ北郊外ロワシーと接続するのは83年である。以降、この近辺は郊外の若者が好んでたむろする場になる。

8) ロティ『アジヤデ』の翻訳者、工藤庸子が訳注で、緑の眼を「異民族の異質性の記号」として解説している (254)。

9) フランスは81年まで放送放映は国が管理し、80年、ラジオ局は7局しかなかった。81年、社会党ミッテラン政権誕生とともに、8月に民営ラジオ放送局が許可され、9月には個人運営の自由ラジオ局は400を数え、85年の統計では1,500を超えている。このようにして開局されたもののうち、マグレブ系エスニックコミュニティーを意識したFM局が、パリ、リヨン、マルセイユなどの大都市を中心に多数ある (Derderian)。セバールはブールFM始め、10局をシェラザードの手帳に載せている。

引用文献（発行場所のないものはすべてパリ）

Aïchoune, Farid, et Isabelle Monnin. 2000. "Discriminaton: un mal français." *Nouvel Observateur* 1848, 6-12 avril 2000: 38-40.

Barthes, Roland. 1970. *S/Z*. Seuil. coll. Points.

Begag, Azouz. 1986. *Le Gone du Chaâba*. Seuil. coll. Points.

---. 1988. "Les Jeunes filles d'origine maghrébine et les symboliques de la mobilité." *Hommes et Migrations*. 1113, juin: 9-13.

Benarab, Abdelkader. 1994. *Les Voix de l'exil*. L'Harmattan.

Ben Jelloun, Tahar. 1984. *Hospitalité française*. Seuil. coll. Actuels.

ベン・ジェルーン (Ben Jelloun)、タハール. 1996. 「境界線からのアンガジュマン」澤田直訳、『ユリイカ』11月号. 50-59.

Battegay, Alain. 1985. "Les «Beurs» dans l'espace public." *Esprit* 102, juin: 113-119.

Bonn, Charles. 1996. "L'Autobiographie maghrébine et immigrée entre émergence et maturité littéraire, ou l'énigme de la reconnaissance." In *Littérature autobiographique de la francophonie*, dir. Mathieu Martine, 203-222. L'Harmattan.

Boudjedra, Rachid. 1995. *Lettres algériennes*. Grasset.

Charef, Mehdi,. 1983. *Le Thé au harem d'Archi Ahmed*. Mercure de France. coll. Folio.

Costa-Lascou, Jacqueline. 1984. "Quelle nationalité?" *Les Temps modernes*. 452-453-454, mars-avril-mai: 1776-1791.

Derderian, Richard L. 1997. "Broadcasting from the Margins: Minority Ethnic Radio in Contemporary France." In *Post-colonial Cultures in France*, ed. Alec G. Hargreaves and Marc McKinney, 99-114. London: Routledge.

Djaout, Tahar. 1990. "Une Écriture au «Beur» noir." *Notre librairie* 113, oct-déc: 35-38.

Djebar, Assia. 1995. *Le Blanc de l'Algérie*. Albin Michel.

Gaspard, Françoise, et Farhad Khosrokhavar. 1995. *Le Foulard et la République*. La Découverte.

ギャスパール (Gaspard)、F. ／セルヴァン=シュレベール (Servan-Schereiber)、C. 1989.『外国人労働者のフランス』林信弘監訳、法律文化社.

Gillette, Alain et Abdelmalek Sayad. 1984. *L'Immigration algérienne en France*. Éditions Entente.

Glissant, Edouard. 1981. *Le Discours antillais*. Seuil.

ゴイティソーロ (Goytisolo)、フアン. 1996.『戦いの後の光景』旦敬介訳、みすず書房.

Guénif Souilamas, Narcia. 2000. *Des "Beurettes" aux descendants d'immigrants nord-africains*. Grasset.

Hargreaves, Alec G. [1991] 1997. *Immigration and Identity in Beur Fiction*. Oxford: Berg.

Hayes, Jarrod. 2000. *Queer Nations: Marginal Sexualities in The Maghreb*. Chicago: Chicago UP.

林 (Hayashi)、瑞枝. 1984.『フランスの異邦人』中央公論社.

---. 1993.「移民第二世代とイスラム —— フランスの社会的統合過程のなかで」、梶田孝道編『ヨーロッパとイスラム —— 共存と相克のゆくえ』有信堂. 131-152.

Hugon, Monique. 1986"Leïla Sebbar ou l'exil productif." *Notre librairie* 84, juillet-sept: 31-37.

梶田 (Kajita)、孝道. 1988.『エスニシティと社会変動』有信堂.

Khatibi, Abdelkebir. 1979. *Le Roman maghrébin : essai*, Rabat: SMER.

Laronde, Michel. 1987-8. "Leïla Sebbar et le roman «croisée» : histoire, mémoire, identité." *Revue Celfan* 7: 6-13.

---. 1988. "La «Mouvance beure»: émergence médiatique." *The French Review* April: 684-692.

---. 1993. *Autour du roman beur, Immigration et Identité*. L'Harmattan.

Lionnet, Françoise. 1995. *Postcolonial Representations: Women, Literature, Identity*. Ithaka: Cornell UP.

ロティ (Loti)、ピエール. 2000.『アジヤデ』工藤庸子訳、新書館.

Mehrez, Samia. 1993. "Azouz Begag: Un di zafas di bidoufile or The Beur Writer: A Question of Territory." *Yale French Studies* 82: 25-42.
Merini, Rafica. 1999. *Two Major Francophone Women Writers, Assia Djebar and Leïla Sebbar*. New York: Peter Lang.
Mortimer, Mildred. 1990. *Journeys Through the French African Novel*. Portsmouth: Heinemann Educational Books.
Orlando, Valérie. 1999. *Nomadic Voices of Exile: Feminine Identity in Francophone Literature of The Maghreb*. Athens: Ohio UP.
Said, Edward W. 1984. "The Mind of Winter." *Harper's Magazine* Sept: 49-55.
Sebbar, Leïla. 1981. *Fatima, ou les Algériennes au square*. Stock.
---. 1982. *Shérazade, 17 ans, brune, frisée, les yeux verts*. Stock.
---. 1984. *Parle mon fils, parle à ta mère*. Stock.
---. 1985. *Les Carnets de Shérazade*. Stock.
---. 1991. *Le Fou de Shérazade*. Stock.
---. 1996. "La Jeune fille au balcon" in *La Jeune fille au balcon*. Seuil.
---. 1997. "Rencontre avec Leïla Sebbar écrivain." *Un Éléphant dans le jardin*. le 6 mars 1997: n. pag. Online. Internet. 26 fév. 2000.
Sebbar, Leïla, et Nancy Huston. 1986. *Lettres parisiennes*. Barrault.
Sebkhi, Habina. 1999. "Une Littérature «naturelle» : le cas de la littérature «beur»." *Itinéraires et contacts de cultures* 27: 27-42.
Woodhull, Winifred. 1993. *Transfigurations of The Maghreb: Feminism, Decolonization, and Literatures*. Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.